

【方法】 当科において 1992～2014 年までの 23 年間に皮下鋼線吊り上げ式法腹腔鏡下手術を 5,110 例施行した。診療録を用い後方視的に術式の内訳、年齢、BMI、出血量、手術時間、再手術、開腹へ移行率についてそれぞれ検討した。

【成績】 術式の内訳は卵巣腫瘍摘出術 (32.1%)、付属器切除術 (6.71%)、子宮筋腫核出術 (38.5%)、子宮全摘術 (7.2%)、異所性妊娠手術 (11.5%)、その他 (4.1%) であった。患者の平均年齢は 39.3 歳で BMI 21.1 であった。手術の平均出血量は 153.2 ml で平均手術時間は 131.3 分であった。また術中に開腹に移行した症例、術後に再手術に至った症例は共に 0.28% であった。

【結論】 我々は以前より皮下鋼線吊り上げ式法は安全性、操作性、経済性に優れた術式であることを報告してきたが、今回再手術、開腹率の観点からも有効な治療法であると示唆された。今後も症例を重ね、検討を続けたい。

### P3-46.

#### 腎機能低下が筋ジストロフィーマウスの骨ミネラル代謝異常を惹起する

(病態生理学、東京大学大学院 総合文化研究科)

○和田 英治

(病態生理学)

林 由起子

(東京大学大学院 総合文化研究科)

吉田 瑞子、松田 良一

(大阪大学大学院 医学系研究科)

濱野 高行、松井 功

デュシェンヌ型筋ジストロフィー (DMD) は最も頻度が高く、かつ重篤な遺伝性の筋疾患である。現在のところ根本的な治療法は確立されていないが、人工呼吸療法や心筋保護治療法によって患者の寿命は飛躍的に延びている。一方、大多数の患者が骨密度低下による骨粗鬆症や骨折を経験し、さらに患者の高齢化に伴い腎機能低下などの多臓器不全が新たな合併症として報告されている。

我々はこれまでに、食生活において問題視されているリン過剰摂取が DMD モデルマウスである mdx マウスの骨格筋症状を重篤化することを報告した。この結果を踏まえ、本研究では mdx マウスは腎機

能が低下していると推測し、腎機能低下が骨ミネラル代謝に与える影響を検討した。骨格筋量に影響を受けない腎機能の指標である Cystatin C の血中濃度は、mdx マウスにおいて有意に増加しており、さらに X 線 micro-CT スキャナーを用いた腎機能テストにおいても腎機能が低下していることを明らかにした。また、mdx マウスの血中カルシウム濃度が高値であることに着目し、尿排泄量とヘマトクリット値を測定した結果、脱水症状であることを突き止めた。このことから、mdx マウスは筋ジストロフィー症状による筋崩壊と不動症が原因で血中カルシウム濃度が増加し、脱水を引き起こすことで腎前性腎不全に至ることが明らかとなった。さらに mdx マウスに食餌中リンを負荷すると、血中リン酸濃度が増加し副甲状腺ホルモン (PTH) が有意に上昇した。mdx マウスは腎機能が低下しているため PTH 抵抗性が起こり、骨が正常の代謝・回転を維持できなくなる uncoupling が生じることで骨粗鬆症が亢進することが明らかとなった。これらの研究結果から、DMD 病態と腎機能低下による骨ミネラル代謝異常は、DMD 患者が骨を健康に保つ上で今後さらに着目されるべきであり、対処療法の確立が重要であるといえる。

### P3-47.

#### IgA 腎症に対するステロイドパルス療法の用量別効果に関する検討

(腎臓内科)

○渡邊カンナ、岡田 知也、長岡 由女

岩澤 秀明、和田 憲和、榎藤 麻子

宮岡 良卓、壽 智香、菅野 義彦

【目的】 IgA 腎症に対し扁桃ステロイドパルス療法 (TSP) をおこなう際のステロイド投与法は確立されていない。Pozzi 方式 (パルス療法 0、2、4 か月後各 3 日間、経口 PSL 0.5 g/kg 隔日 6 か月間) におけるメチルプレドニゾロン (mPSL) 投与量の違いによる免疫学的指標、治療効果の差異について検討した。

【方法】 IgA 腎症患者を対象に、扁桃後無作為に mPSL 1 g/日群 (A 群 8 名)、0.5 g/日群 (B 群 8 名) に分け、Pozzi 方式のステロイド投与をおこない、免疫学的指標、治療経過を 6 か月間観察した。

【結果】 治療開始時の臨床背景に有意差を認めなかった（A群/B群：尿蛋白； $1.27 \pm 1.72/0.98 \pm 1.12$  g/gCr、IgG； $1,011 \pm 338/1,149 \pm 162$  mg/dl、IgA； $336 \pm 178/332 \pm 112$  mg/dl、CD3； $75 \pm 8/75 \pm 4\%$ 、CD20； $9 \pm 3/10 \pm 3\%$ 、CD4/8比； $1.4 \pm 0.4/1.5 \pm 0.5$ ）。治療6か月後において尿蛋白0.3 g/日未満の症例はA群4名/B群4名、血尿なしの症例はA群4名/B群5名、IgG、IgA、CD3、CD20、CD4/8比に有意差は認めなかった。これらの投与1、2、6か月間の変化率も有意差は認めなかった。

【結論】 mPSL 0.5 gと1 gでは免疫学的指標、治療効果に有意差は認めず、mPSL 0.5 gで効果が得られると考えられた。

### P3-48.

#### 閉塞性動脈硬化症の病変部位と $\omega$ 脂肪酸に関連に関する研究

（心臓血管外科）

○岩崎 倫明、西部 俊哉、鈴木 隼  
室町 幸生、藤吉 俊毅、岩堀 晃也  
猪野 崇、高橋 聡、戸口 佳代  
神谷健太郎、岩橋 徹、小泉 信達  
荻野 均

（公衆衛生学）

安部由美子、井上 茂

【背景】 近年、閉塞性動脈硬化症（ASO）の危険因子としてEPAやDHAの様な $\omega$ -3系脂肪酸との関連が指摘されている。

【対象と方法】 2011年8月から2013年11月までの98例（男性79、女性19、 $73.0 \pm 7.3$ 歳）が対象。喫煙の既往72例（73.5%）、喫煙中37例（37.8%）。平均BMI： $22.4 \pm 3.3$ 。高血圧72例（73.5%）、脂質異常症50例（51%）、DM43例（43.9%）、IDDM18例（18.4%）。既往症は、脳梗塞31例（31.6%）、心筋梗塞36例（36.7%）、血液透析13例（13.3%）。ASOの重症度は、重症虚血肢（Fontaine III/IV度）26例（26.5%）、平均ABIは $0.56 \pm 0.21$ であった。患者を末梢動脈病変（鼠径部以下の動脈病変）を有する患者72例と有さない患者26例に分けて、 $\omega$ 脂肪酸と各因子（年齢、性別、BMI）、重症虚血肢、ABI、高血圧、脂質異常症、糖尿病（DM）、脳梗塞・心筋梗塞の既往、血液透析との関連を検討した。

【結果】 DHA  $139.2 \pm 53.3$ 、EPA  $70.45 \pm 41.37$ 、DHA/AA  $0.83 \pm 0.32$ 、EPA/AA  $0.42 \pm 0.24$ 、T-Chol  $176.4 \pm 36.2$ 、HDL  $46.3 \pm 13.9$ 、LDL  $99.8 \pm 33.5$ 、TG  $151.7 \pm 85.9$ 。末梢動脈病変に有意な危険因子はABI低値、DHA低値、EPA+DHA低値、TG高値、重症虚血肢、糖尿病、IDDMであった。多変量解析では、末梢動脈病変の発症に有意な独立危険因子はABI低値（ $p=0.010$ ）、DHA低値（ $p=0.037$ ）、重症虚血肢（ $p=0.045$ ）であった。

【結語】 末梢動脈病変の存在がABI低値、重症虚血肢の原因となる一方、DHA低値が末梢動脈病変の発症につながっていると推測された。DHAはEPAと異なる抗動脈硬化作用を有していると考えられた。

### P3-49.

#### Person-Centered Careの概念分析 — 慢性疾患患者ケアにおいて —（第2報）

（医学部看護学科）

○山岸 直子

【目的】 慢性疾患患者ケアにおける person-centered care の概念を明確にする。

【方法】 概念分析の方法は、Rodgers（2000）の概念分析のアプローチ法を用いた。文献の抽出は、MEDLINE、CINAL、医学中央雑誌を用いて行った。分析は、帰納的、主題的な方法で実施した。

【結果】 属性として、〈患者と看護師の信頼関係の構築〉、〈患者の自己管理に向けた患者と看護師の協働〉、〈患者の家族・重要他者も含めた全人的ケア〉、〈患者の視点を自己管理に組み込んだ個別的ケア〉、〈患者ケアの調整〉、〈患者の自己管理能力の発展〉の6つが明らかになった。先行要件としては、〈組織的ケア環境〉、〈看護師の価値・信念、態度〉、〈看護師の能力〉、〈看護師の経験の内省〉、〈患者の人口統計学的な特質〉、〈患者の価値・信念〉、〈患者のパーソナリティ、コーピングパターン〉、〈患者の能力〉、〈患者の経験〉の9つが見出された。帰結として、〈患者のヘルスアウトカムの向上〉、〈経済的効果〉、〈患者の医療者とのコミュニケーション能力の向上〉、〈患者のケア満足度の増加〉、〈ケアの質の向上〉、〈看護師の看護援助における満足度の増加〉の6つが見いだされた。